

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一 アメリカ大陸に住んでいた先住民に関する次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

きわめて民主的な政治システムを完成していたイロクオイ族（現在のニューヨーク州付近に住んでいた人々）では、部族の会議が開かれるたび、人々はまず自分たちの①ギムを次のような言葉で誓いあうのだった。「何事を取り決めるにあたっても、われわれの決定が以後の七世代にわたっておよぼすことになる影響をよく考えなくてはならない」と。ある決議事項をめぐって自分が投票するなら、その票は自分だけではなく、まだ（A）者たちも含めて、以後の七世代のための一票なのだ。ざっと見て、百五十年から二百年。そんな遠い未来の子にまで、いくつもの世代を超えて、いま決められたこのことは、影響を与えつづけるのだから。

衝撃的な視点だと思う。単純だが、透明な水のように深い。われわれのどれだけが、何事を考えるにせよ、七世代を見通した上で決断を下しているだろうか。ふたたび「実感」という曖昧な真実に従うなら、ぼくらの大部分の者にとつては、ほんの二世代前あたりで（祖父母の存在とともに）突如として歴史的世界がはじまり、未来にしてもせいぜい二世代後（自分の孫たちあたり）までを、自分自身の生きてきたわずか数十年からの不確実な②ルイスイに立つて想像しているにすぎないのではないだろうか。

子のため孫のためを考える人は、いくらでもいる。Bそれは結局は利己的な視点（中略）だ。

七世代の後を見通す。それはすでに「家系」はおろか、ヒトという「種」さえも超える。

七世代後のことを真剣に考えるなら、農林水産業にしても、工業の各分野にしても、都市計画にしても、消費の全般的体制にしても、Cたちまち重い沈黙が強いられることは確実だろう。いまもわれわれには未来が、未来という名で呼ばれる未確定のすばらしい拡がりそのものが、はたしてありうるかどうかさえ、わからない。二百年とは、いかにも長い時のようにも思われる。だが、変わりはてたように思われるぼくらの生活圏にだって、たとえばこの二百年をおなじ場所で生きてきた大きな樹木は、まだいくらかでも見つかる。そして二百年前の人々が見たこともなかったプラスチックは日常生活のすみずみまで入りこみ、分解されることもなく次の二百年を生き延びて、海に山野に溜まってゆくだろう。

「7」とは、アメリカ・インディアン多くの部族にとつて、特別な意味をもつ数字だ。7が特別な数となった理由としては、おそらく次の二つがあげられると、ぼくは考えている。

まず、方位。東西南北という基本方位に、上と下を加えて、6。この三次元の③ザビウの原点にいる自分の位置が、7にあたる。ついで、世代。自分の発生源である父と母に、それぞれの両親を加えて、6。そしてこれらの直接的な先祖たちがひとつに※収斂する点である自分が、7にあたる。

7、それは私のいる場所、私という世代、私の位置。この7から新たにはじまる七世代を、強く想像することができるとどうか。

どんな相手からであれ、ぼくらが学びそれをもって世界に働きかけようとする知識に、ある最低限の倫理的な了解事項が必要だとしたら、まずこの「七世代の掟」を念頭に置くべきだろう。

ついでにいつておくなら、われわれ人間に「永遠」はない。はるかな未来に太陽が消滅することは運命づけられているし、それよりはるかに早い時点で、地球は現行の生物の大部分を④キョウウしない環境となることだろう。だが、その宇宙物理的な宿命は、生物の進化史の⑤シャクトルを超えている。そこまで先を急いでも仕方がない。ヒトは鉱物の運命や天体の運命に※与することはできない。

それに対して、生命の運命には、われわれは「はじめ」から参加してきた。「私」を作り上げるこの細胞は、地球に「最初」に発生したひとつの単細胞からの、遠い系統発生の旅の、直接の後継者なのだ。

こうして「生命」に連帯することは、われわれの「生存」の重要な一部だ。そして生命との連帯は、人の生活と意識が「ヒト」という種の中だけで完結することをゆるさない。Dそのことに対する痛切な自覚も、「七世代の掟」には、はじめから織りこまれていた。

（管啓次郎 小池桂一『野生哲学 アメリカ・インディアンに学ぶ』）

※収斂：一点に集まること

※与する：仲間になる

問一（A）にあてはまる言葉を考えて五文字～十文字で答えなさい。

問二 Bとありますが、何が、なぜ利己的だといえるのでしょうか。説明しなさい。

問三 Cとはどういうことですか。具体的な例をあげて説明しなさい。

問四 Dを、「そのこと」の内容も含めて分かりやすく説明しなさい。

問五 ①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

一一 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

わたしは、べっぴんさんのチドリです。

だれよりも大きく黒い目、なめらかでかたちのよいクチバシ、上品な曇り空のような羽色。そして、若枝のようにしなる、ほそい足。小さなところから、べっぴんさん、べっぴんさんと、うるさいくらいいわれつづけてきました。

ひとりでいると、ほかのチドリから声をかけられます。

「おはよう。きょうもべっぴんさんね」

あたりまえです。

と、思いながら「おはよう」とかえます。

「そろそろ、さむくなってきたわね。べっぴんさん、どうするの」

相手はなぜか笑いをこらえたようにたずねます。

そういうとき、わたしは返事をしません。

また、べつのチドリもやってきています。

「べっぴんさん、なかよくしないかい」

わたしはじぶんにふさわしい相手かどうか、だまってじっと見つめます。

相手は思い出したようにいいます。

「ああ、でも、むりだね。べっぴんさんは、ここにのこるのだからね」

「いっさい、わたしは気にいたしません。」

潮だまりに、じぶんのすがたをうつします。

なんてきれいなんでしょう。われながら、ほれぼれします。

そのうえ、海は青みがかった灰色。

風がふくと、白い波と青灰色の海の、だんだらもよう。

Aうつくしいけしきにたたずむ、べっぴんさんのチドリ。

わたしのところは満ちたりて、波がない海のようにぴたりとどこまでも平らです。

しばらくして、すずしい風がわたしの羽をゆらしました。

耳につくのは波の音。

いつのまにか、ほかのチドリたちを見なくなりました。

朝夕がすずしくなったのは、もうずいぶんまえのことです。

このごろは、おひさまが頭のうえにあるときも、ひんやりとした風がふくようになりました。

ああ、そうだと、思いました。

みんな、行ってしまったのでしょうか。

ある日、カニに会いました。

わたしはカニもいただきます。

けれど、いたくには大きすぎるカニでした。それがわかっているのでしよう、カニはかくれもしないで、ずうずうしくちかづいてきました。

「あんたは南へは行かないのか」

わたしは聞こえないふりをしました。

「あんたが冬をこすには、ここはさむすぎるよ」

わたしはカニを見おろし、いつてやりました。

「あなたがもうすこし小さかったら、食べていたわ」

べつの日、トンビがわたしのうえをぐるぐる回っていました。ひどくおながすいているのでしょうか。しつこく回ります。わたしは、ちよん、ちよん、とびはね、いそいでにげました。岩かげにとびこんだちょうどそのとき、トンビは風をきって、お

りてきました。

岩にぶつかりそうになり、あわててまた空へとあがっていきます。

わたしは、どきどきしながら、岩かげにじっとしていました。

へいき？ と、じぶんで聞きました。

へいきよ、と、じぶんでこたえました。

さらにつめたい風がふくようになりました。

海の灰色も、濃こくなっています。

一羽のチドリが、どこからかやってきました。

わたしよりもからだが大いのに、足は短く、目も小さい、ぶかつこうなチドリです。

ぶかつこうなチドリは、浜はま辺におりると、わたしのところにやってきました。

「あなたは、ひとりですか」

「ええ」

「ほかのチドリたちは、どうしたのですか」

「南へ行っただけでしょうね」

「あなたは行かないのですか」

わたしは返事をしませんでした。

ぶかつこうなチドリはしばらく、そばをちよんちよん歩いていましたが、ついつと、とんでいきました。

つぎの日もまた、ぶかつこうなチドリはやってきました。

散歩をしているわたしのそばで、食べものをさがしながらいいました。

「ひとりは、さびしいでしょう？」

わたしは、たからかに笑いました。

「ちつともさびしくありません」

ぶかつこうなチドリは、まぶしいものを見るように、わたしを見つめました。やっと、わたしのうつくしさに気がついたのかもしれない。

ぶかつこうなチドリはなにか考えこむようにうつむいて、それからはなれていきましたが、すこしするともどつてきました。

「ぼくたちは、草原に立つ一本の大木じゃありません」

「どういう意味かしら」

わたしは注意深く、たずねました。

ぶかつこうなチドリは、小さな黒い目で、まっすぐにわたしを見つめました。

あくる日、ぶかつこうなチドリがまた来るだろうか、わたしはそわそわしていました。

でも、やってきませんでした。

もしかしたら、南へ行ってしまったのかもしれない。

でも、こういうことは、きちんとたしかめておいたほうがよいことですから、ぶかつこうなチドリのねぐらのあるほうへ歩いていきました。

ぶかつこうなチドリは、砂浜にはえた短い草にかくれるようにうずくまっていました。

わたしを見ると、はずかしそうに顔をあげました。

「ちよつと、けがをしましてね」

そういうと、羽でそつと足をおさえました。

わたしはすぐ、波打ちぎわへ行つて、小さな貝とやわらかなミミ

ズをつかまえ、ぶかつこうなチドリのところへもっていきました。
ぶかつこうなチドリはだまって、わたしを見あげました。それから、とてもおいしそうにゆつくりと食べました。
そうした日が三日、つづきました。

ぶかつこうなチドリが、やってきました。すっかり元気になったようです。

「ぼくもあした、南にむかって、たちます」

ぶかつこうなチドリは思いきったようにいいいます。

「あなたもいっしょに行きませんか。そして、つぎの春、いっしょにあかんぼうをそだてませんか」

わたしはだまりこみました。

ぶかつこうなチドリは、がっかりしたようでした。

わたしはだまったまま、じぶんのうちのほうへ歩いていきました。

B息をすいました。

でも、あさくしか、できません。

むりにすると、胸がいたいのです。

つぎの日、わたしはながい時間をかけて、がけのうえまでのぼりました。

ぶかつこうなチドリが、たつのを見ようと思ったのです。

よくはれていて、水平線がくつきりとしていました。

水平線のうえには、はてしない空がひろがっています。

わたしが、いちどもとんだことのない空。

おさないとき、わたしは兄弟といっしょに、とびたつ練習をしました。

でも、こわくてたまりませんでした。

落ちてしまう！

そう思うと、羽もからだも、ちぢこまり、ふるえます。

そして想像したとおり、なんどやっても落ちました。

おくびょうものと、いわれました。

鳥にうまれた意味がないねと、笑われました。

でも、わたしは地面にうずくまりながら思ったのです。

わたしはうつくしく、りっぱすぎるから、とべないのです。兄弟たちは、わたしのようにうつくしくないから、あんなにむぞうさとべるのです。

そのとき、だれかが頭のうえでわたしをよびました。

見あげると、ぶかつこうなチドリが、わたしのうえをとんでいました。なんども、輪をえがくようにとび、それからなごりおしそにいいいました。

「さようなら」

思わず、わたしはがけからとびたちました。

とたん、おちていきました。
やつぱり、わたしの羽は役立たず。
青灰色の海が、ぐんぐんちかづきます。
目をつよくつぶりしました。

わたしのからだはもうじき、つめたい海の底によこたわるのでしよう。

しかたのないこと、いいのです。

いずれにせよ、こうなる運命でした。はやいか、おそいかのちがいです。

そのとき、なにかが、落ちていくからだをしたからおしとどめました。

目をあげると、ぶかつこうなチドリが、わたしのからだをすくいあげるようにささえていました。

おもさにたえながら、あえぎながら、いいいます。

「ひろげて、もつと羽をひろげて！」

けれど、わたしはこれでもせいっぱい、ひろげているのです。

「もつと！ もつとだ！」

ぶかつこうなチドリの言葉は熱いかたまりになって、わたしにぶつかりました。

わたしはひつしで、はばたきました。

「ちがう。風にのるんだ」

ぶかつこうなチドリは苦しそうです。

「ああ、はやく、もつと力をぬいて。なにをこわがっているの。こわいものなんて、なにもないのに」

ほんとうでしょうか。

ほんとうに、こわいものなんて、ないですか。

わたしはもういちど目をつぶりしました。

風はどちらからふいているのでしょうか。

つめたい空気のかたまりを感じると、小さくかたくかためていたものを、ひろげました。

とたん、風がわたしのからだをおしあげていきます。
ああ、とべる！

おどろいて、ぶかつこうなチドリを見ました。
かれは、ほほ笑み^えました。

「さあ、いそごう」

「はい、まいりましょう」

海面に二羽のチドリのすがたが、うつっていました。

よく見ると、わたしはそれほど、べっぴんではありませんでした。
わたしは、ほつとしました。

それから、つめたく気持ちのよい風につて、ぐんぐんあがつていきました。

(魚住直子『クマのあたりまえ』より「べっぴんさん」)

問一 部に入るふさわしいセリフを、十字〜十五字(句読点をふくまない)で考えて答えなさい。

問二 Aとありますが、この時の「べっぴんさん」の「こころ」の様子を、本文全体から想像してくわしく説明しなさい。

問三 Bとありますが、この時の「べっぴんさん」の気持ちを考えて答えなさい。

問四 「べっぴんさん」が空をとぶことができるようになったのは、なぜだと思いますか。Aの後、「べっぴんさん」の気持ちがどのように変化したかを考えて、二〇〇字以内で答えなさい。

問五	問四	問三	問二	問一
①				
②				
③				
④				
⑤				

[illegible]